

子どもの権利、子どもの社会参画のために

小島千春さん

(特定非営利活動法人 こども NPO 元理事長)



<プロフィール>

小島千春さん

1955年生まれ。第2子を自主保育で育てるなか、子どもの育ちや子どもが育つ環境に興味を持ち、子ども支援に携わる。子どもの遊び研究会「どんぐり」、新海池コミュニティーガーデン公園愛護会を経て、特定非営利活動法人こどもNPOに参加、子どもの参画の実践、推進する。

<こどもNPOでの主な活動>

子どもサポーターとして、子どもの居場所と子どもの参画の機会、場づくり。中川児童館館長、緑児童館館長、名古屋市子ども子育て支援センターセンター長を経て、2024年現役を退く。2018年～2021年こどもNPO理事長。その他、主任児童委員を16年務める。



<参考>こどもNPO ホームページ
<https://kodomo-npo.or.jp/>

インタビュー日時：2024年9月6日
聞き手：松村智史（人間文化研究科/都市政策研究センター）

松村 どうぞ、きょうはよろしくお願ひいたします。

小島 よろしくお願ひします。

松村 最初に、この都市政策研究センター、オーラルヒストリーの趣旨ですけれども。名古屋市として重要な政策の展開ですとか、そこに関係する人々の公的文書には残っていない当時の思いとか葛藤とかっていうのを、アーカイブとして残して後世につないでいくってことを大きな目的としてやっております。記念すべき今回は小島さんということですので、また貴重なお話が聞けるのではないかなというふうに、私自身もすごくきょう楽しみにしていたところです。それでは、小島さんの大きなこれまでの歩みというか、どんなところからこういう、子ども子育てとかに関心を持ってNPOに入られ、そこでさまざまな事業を展開され、理事長も務められ、現在に至っていらっしゃるのかっていう、ざっくりで構いませんのでライフストーリー的なところから、お話しいただいてもよろしいでしょうか。

小島 子どもに関わることになったのは、自主保育を仲間と一緒にやったっていうのが最初のきっかけなんですけれども。その前に、黒柳徹子さんの『窓ぎわのトットちゃん』の本を読んで。こんな、トモエ学園のような学校があったらいいなとか、先生の子どもに対する働き掛けとかがいいなっていうのを、ぼんやりと思ってたっていうのが最初だったんですけれども。

上の息子は、地域の友達、子育ての仲間が幼稚園に行くことで、一緒に幼稚園のほうに行くことにしたんですけれども。2番目の娘のほうが、ちょっと個性が強いというか、人見知りも強くて、どうしようかなって思ってたときに、自主保育を知りました。原京子さんと石原信行さんが、こどもNPOを立ち上げたんですけれども。その原京子さんも自主保育の立ち上げメンバーでした。自主保育では本当に子どもの自主性をすごく大事にしている。そこに関わってくださった保育士さんがとてもすてきな方で、その方の影響を、私も大きく受けて。子どもにとって何が大事なのかなとか、子どもが生活する環境っていうものが、どういうものがあっていいのかっていうのをいろいろ学ばせていただきました。

子どもが小学校に入学する年齢になっても、何か外で遊ぶとか、いろんな体験をたくさんするとか、そういう環境を残したいなということで、自主保育のメンバーと子どもの遊び研究会どんぐりっていうのをつくったんですね。プレイパークのことを勉強したりとか、外遊びをしたりとか、実験したりとか、本当にいろんなことをしていて。その延長でこどもNPOに関わることになりました。子どもの社会参画について、奥田陸子さんがイギリスの事例を翻訳されてるんですけど、子どもの参画っていうのに共感してつくったこどもNPO。私は、もともとデザイン関係の仕事をしてたので、広報とか、何かお手伝いできればいいなと思いながら関わったっていうのが最初です。



松村 そうなんですね。ありがとうございます。自主保育から始められた。その後子どもを大切にしている、今のこどもNPOさんですか、昨今の子どもの権利やアドボケイトとかってところと、非常に先駆的なミッションを掲げていらっしゃるところに入ったんですね。

小島 そうですね。先駆的というか、自主保育自体が本当に子どもの思っていることとか、子どもの意思を大事にするところで。すごく記憶に残ってるのは、毎日シールをノートに貼るんですけれども。親は順番にきれいに貼らせたいとかっていう思いがあるんですけど、その保育士は自分で選ぶこと、どこに貼るかとか、どういうふうに貼るかとか、そういうのは子どもが自分で選ぶものだっていうふうな考えで。きれいに貼るとか、そういうことが大事じゃないっていう、そういう考えの方だったので。そうなんだっていうことがいろいろ、腑に落ちてというか。子どもがどうしたいか、そのためにどうやっていくかみたいところを一緒に見守ったり考えたりしながらやれるっ

てというのが、私にとってはすごく納得がいったんですね。

その延長線上で、こども NPO も子どもの声を聞くとか。大体、何かやろうよっていても、できるわけがないとか、面倒くさいとか、そういうふうにもちからからは返ってくるんだけど。ちょっとやりだせば、どんどん子ども自身がやり始める。そのきっかけをつくれるっていうのが大事なんだなっていうか。大人の役割としてはそういう場とかきっかけをつくるのが大事なんだっていうふうに思っている。それが子どもの参画というところに入っていたので。

松村 そうなんですね。分かりました。ありがとうございます。ちょっとまた後で戻るかもですけども、いただいた資料とかも参考にしながらお話を伺えればと思うんですが。このプロジェクト、冒頭申し上げたように、名古屋市の子ども政策を、もちろん行政職員だけではなくて、NPO さんとか社協さんとか、いろんな方がコラボレーションというか連携、協働しながらやっていく中で、NPO の代表として今日は、こども NPO の小島さんからお話をというふうに思っておるところなんですけれども。行政との関係っていう点でいうと、ご準備していただいた協働事業の欄のところに書いてあるところで、一緒にさまざまな実践プロジェクトを進められていらっしやっただなというふうに感じておるところです。ちょっとこの辺り、順番にお伺いしたいなというふうに思うんですけれども。最初に行政との協働という点でいうと、日進市のものだと思うんですけれども。この辺

り、行政との協働に至るまでの経緯とか、まず教えていただけますか。

小島 行政との一番のつながりというか、行政のほうと関わったのが代表の原京子で、いろんなところに行って仕事を取ってくるというか。

松村 そうですね。

小島 なので、最初にどういう関係性をつくっていたかとかっていうのは、ちょっと本人じゃないと私もよく分からないところなんですけれども。日進市の計画のところ、原さんが関わることになって。子どもとのプロジェクトということで、いくつかのグループで日進市の環境問題についての、年間に何回か集って、子どもと一緒に、いろんな問題を考えて、提案のものをつくっていくということで。そのグループワークに関わったという形ではあります。

松村 そうなんですね。

小島 だから、最初のいろいろな事業を行うきっかけになったのは、原さんの動き。

松村 なるほど。

小島 私が一番いろいろ関わってきたのは、「こどものまち」で、「いきいきなごやっ子づくり」のモデル事業とかもやったんですけど。こどものまちのほうで子どもと、いろいろつくってきたって

うのは、直接私に関わってきた事業ではあったと思います。

松村 分かりました。ちょっとまた、そこら辺、今話を踏まえて聞いていきたいんですけども。はじめは、原京子さんの動き、背中っていったらオーバーかもしれないんですけど、いろいろ行政とやりとりする中で、恐らくいろんな行政とNPOのスタンスの違いを感じたと思います。当時抱いた行政に対する問題意識とか要望とか、もしくは対応の仕方とかそういうことは、その後の小島さんのご経験とか、戦略とか振る舞いとか、そういったところにも影響を与えている何かあったりするんでしょうか。

小島 私、個人的な感覚ですけど。行政の方でも、その方によって全然動きが違うっていうのはあるので。すごく話がスムーズに通ると、どうしても上に通していくっていうのに時間がかかってしまって、子どもたちに待つ時間をどう説明したらいいのかなって思うようなことも。子どもが地域のイベントのところで何かやりたいっていったときに、それを許可してもらうのにすごく時間がかかって、やれるかどうか分からないっていう、その説明をしてほしいなと思うようなこととかは、あったりするんですけども。

いろいろやってきて、今まで関わってくださった行政の方は、すごく理解があって柔軟に対応していただいて、やりやすい方が多かったんですけど。何年かうまくいったな、すごく意思疎通ができるようになったなと思うと、異動になって

しまうというところで。また一から説明したり関係をつくったりしていかなくやいけないっていうところでは、せっかくここまでお互いの理解ができたのに、残念だなんて思うことはありました。

松村 そうなんですね。どの事業でも公務員は1年2年3年で異動するのは、それは仕方ないとして。一方で子どもとか人を相手にするものって、その子どもの特性だとか、その場所の特性とかっていうのを、長期的に見ていく必要性もあったりすると思うんですが。今のお話を踏まえると、やっと意思疎通ができるようになって、理解が深まったと思ったら、さよならみたいなことが結構定期的にあったりして。その都度これまでの経緯を説明したりだとか、また新しくその関係性を築いていったりすることは、難しい面とかもあったりするのかなと思うんですが、いかがですかね。

小島 子どもたちと何かやるっていうことは、継続していくことがすごい力になるんですよね。なので、子どもともっとこんなことをやりたいとか、こんなところに行って違う場所で刺激を受けるようなことをしたいとか。一つの事業でも、子どもたちも成長していくし、その子たちの今、必要だ、今あったらいいなと思うようなところを続けていきたいと思うんですけども。やっぱりその事業に対して費用もかかるし、いろんな人とのつながりとかっていうのもあるので。そんなところで、いろいろ理解してもらえ行政の方が、続けてやっていただいているんだったら、本当にちょっと言っただけ

でも分かるかなっていうところはあるんですけども。

松村 そうですね。今おっしゃってくださったように、継続することがとても重要で。やっぱり子どもにとって、いつ行っても同じスタッフがいたりとか、同じ場所があるってことが安心できることになると思うんですけど。そうすると本当、行政よりもNPOさんのほうがずっといらっしゃる、継続性がある形になりますので。本当に行政職員よりも詳しいという状況になりますね。

小島 児童館とか公共の施設とか自由に来れるところはあるんですけども。また、それとは違ってピンポンハウスっていうのを、元卓球場だったところなんですけど、そこを借りたっていうのはすごく大きくて。途中で耐震の問題もあって引き払うことにはなってしまったんですけど。そこで子どもたちと本当にいろんな活動ができたっていうのが、私にとっても大きかったというか楽しかったし、子どもにとってもすごい変化があったところなんですね。



松村 ピンポンハウスを、簡単にまたご説明いただけるのであれば、古民家を買って。

小島 借りた。お借りして。

松村 お借りして。ずっと借りている何年間の間は、もう。

小島 そうですね。

松村 ここはいわゆる今でいう学童に限らず、例えば午前中、学校に何らかの事情で行っていない子ども、不登校の子どもたちも行ったりとかする場所だったんですか。

小島 最初の頃は、本当にできた当初は、地域の子もたちとか。特に自主保育で育った子どもたちと、そのつながりの小中学生が、その場所を使って何をやりたいかっていうことを相談しながら、いろんな活動をしたのが最初なんですけれども。小中学生って学校に行っている間は来ないので、午前中は、乳幼児の親子の居場所を開設したりしました。

松村 なるほどですね。なかなかこの時代に、今でこそフリースクールだとか、もしくは子育て拠点みたいに、日中その建物で行き交う施設は、最近でこそありますが、この当時ってあんまりこういうものってなかったように思うんですけど。

小島 そうですね。特に小中高生を対象にしてるところっていうのは、今もあん

まりないかもしれないんですけど。子どもの参画をミッションに立ち上げたっていうので、実際に活動する場がないと、やっぱり本来の子どもたちの活動をサポートするのは難しいっていうので。空き家だったところを、原さんが見つけてきて、民生委員さんが、借りられるようにいろいろ動いてくださって。すごく安い家賃で貸していただくことができたので、助成金とかを申請して、建物を直したりしながら、活動拠点ということでオープンしたんですね。そこがすごく子どもたちにとっても良かった。

松村 なるほどですね。

小島 ピンポンハウスのような場所が、身近な地域にあるっていうのは、すごく大事だっていうふうに思っています。今は、事務所はあるんですけど、なかなか子どもたちの活動として使えるようなスペースがないので、残念だっていう感じはしますね。

松村 ありがとうございます。私、非常に興味深いのは、単に子どもの居場所ではなくて、最初のおっしゃった子どもの参画とかがあって、ずっと通底している、貫いているテーマとしてあって。子ども参画とかを実現する場としての、このピンポンハウスとか活動場所っていうふうに捉えているんですけど、そういう認識でまず合ってますかね。

小島 そうですね。

松村 そうすると、単なる居場所っていうか、本当に不登校とかフリースクールとかの子が日中来て、過ごしててもいいよっていうことにとどまらない、何らかの自分の考えだとか気持ちを、他人や仲間や社会に発信していくっていうことを非常に重視されているような、そういう印象を受けます。また、あらためになっってしまうかもしれないですけど、その狙いとかっていうところ、いま一度教えていただいてもよろしいですか。すごく大切なところだと思うので。単に居場所ではなくて、子どもの参画っていうこととすごくひも付けながら、その活動場所っていうか、いろんな事業されているところが。



小島 子どもに関わるいろんな問題は、地域でも環境でも学校でもいろいろあるんですけど。いじめとか不登校とか、子どもに関わる問題を、子どものためについて言って大人だけが動くっていうことが、本当に子どもにとっていいことなんだろうか。当事者である子どもの意見を聞かないままに、こうしたらいいんだろという想定の下に、いろんなものやっていく。それって本当に子どもが求めているものなのかなっていう。子どもの

ことは子どもに聞くべきじゃない？っていうのが、一番の中心になるので。

こどもNPOを立ち上げる前に、近くの公園の改修工事があったんですけども。その改修工事に地域の人意見も聞いてほしいということで、ほぼ青図ができてるところにいろいろお願いして、ワークショップを開いて、子どもたちも集まってもらって、どんな公園にしたいとか、どんな遊具がほしいかっていう話し合いとかをしたんですけど。大人が子どもにとって、あったらいいなって思う遊具と、子どもがこの遊具がほしいっていうのが、ぴっちり分かれたんですね二つに。そういうのを見てても、子どもが求めているのと、大人がいいなって思うのっていうのが、実際に一致しないっていうのが、そういう中でもすごく気付かされて。

子どもがどう思っているのか、やっぱりそれは子どもたちに意見を聞くべきだと思うし、いろんな知識というか、いろんなことに触れる機会が少ないから選択肢が少ないだけであって。いろんな場があることでいろんな刺激というか、このことをしようよとか、できるよとかやっていく中で、こうしたかったとか、ああしたいとか、子どもたちがいろんな思いを言えるようになってほしいのかな。

松村 なるほどですね。

小島 なので、最初も小中学生の子たちが集まって、1人の女の子がファシリテーターになって、みんなから意見を聞いて。じゃあ何やるっていう、地域の公

園、いつも使っている公園をもう少しきれいにしたいとか。そういう、どういうことをしたいかみたいなものを、いろいろ出し合って。じゃあ大人として、私たちは地域の人をお願いに行くとか、子どもだけでできないお金の部分とか、そういうものを大人としてサポートするけれども、子どもたちがやりたいって言ったものを、どうやって実現させることができるか、それを共に考えるみたいな。

そういう場所って本当にないなと思ったし、私たちでも最初は子どもの参画って何だろうっていう、その勉強から始まったんですけど。でも基本的には、今、子どもアドボケイトって、原京子さんがやってるんですけども、子どもの声を聞くとか、子どもと一緒に考えると、それをする事で子どもたち自身もすごくいろんなことを考えて学んで、変わっていくっていうか。それを続けてるとよく見える。そういう場所でした。

松村 分かりました。

小島 初めは子どもだけだったんですけど、乳幼児の親子さんが使える場所にしていったときも、お客さんにしないっていう。来るお母さんたちにサービスを提供するんじゃなくて、一緒にいろんなことを考えたりする場所にと。子どものことについてでもそうだし、そのお母さんたちが今、何を困っているかとか、何が必要かっていうことも、こっちからいろんなものを提供するんじゃなくて、一緒に考えてその人ができることは、どんどんその人にもやってもらおう。だから、子どもでも大人でも一緒なんですけれど

も。ただ来てその場にいるだけじゃなくて、一緒につくっていくメンバーとか、それが地域とか社会を少しずつ変えていくとか、子どもたちにとって住みやすい場所にしていくっていうのを、やってあげるんじゃないかと一緒にやろうよみたいな。

松村 なるほどですね。ありがとうございます。お客さん、受け身的に参加しているのではなくて、その本人自身も仲間というか一緒にやっていくパートナーみたいな形に、だんだんみんな、なっていくっていう、そういうイメージですかね。

小島 そうですね。だからピンポンハウスに来てた、母親だった人たちが、今、主なメンバーになってたりとか、スタッフになってたりとか、そういう循環みたいなのもできていくっていうところで、すごく貴重な場所です。

松村 そうですね。循環ってふうにおっしゃいましたけれども、本当に行政から言われてこういう活動をスタートしたわけでは決してなくて。むしろ市民の中からこういう活動が産声を上げて、芽生えて、どんどん活動して行って、それがさらに循環して行ってすごく理想的っていうか。それを可能にしている要因って、もしあるとすれば例えばどんなことがあるんですか。私から見ると、なかなか行政がてこ入れして失敗している事例ばかりを見てるから、そう思うのかもかもしれないけど。市民だけに任せていて、そこまで活動がうまく成長、循環し

ていくケースって少ないと思うんですけど。それを可能ならしめている要因とか要素とか、そういうものって何か心当たりとかありますか。

小島 要因っていうか、今、子育て支援の、森の実のスタッフになっている人たちも、もともとピンポンハウスで子育てしていたお母さんが、何人かいてくれたりするんですけども。共感するというか、同じ思いを持てる。これが大事だよっていうところで、自分にとってでも子どもにとってでも、こういうことって大事だよっていうことが、お互いに理解し合えるというところで残していきたいとか。自分もその中の一員として、何かできたらやりたいとか、そういうふうに思ってもらえるっていうのかな。



松村 自発的にそういう思いだとか、もしくは自分だったらこれが得意だからやってみようだとか、そういう役割だとかっていうのを、その中でまたつくって見つけて、自分自身の居場所とかをつくっていくっていうのは、すごく簡単なようであって難しいことだと思うんですね。なので、すごいなど。

小島 いろんな人たちが子育てしてる間は、なかなか今までやってた仕事っていうのは表に出てこなかったりするんですけど。それぞれすごく得意なものっていうのがあって。それすごい得意っていうところを、じゃあそれを今度は講師になって教えてくれるとか、この事業をちょっと手伝ってよとか、そういうところで、引っ張り込むっていうのはすごく言葉が悪いんですけども、助けてもらうっていう形で。これ助けてくれる、一緒にやってくれる？みたいなことで、どんどんスタッフに変わっていく。

松村 得意なことっていうのは、例えば今は子育て中で専業主婦になってるかもしれないけど、昔、働いてたときにやってたこととか、もしくは仕事ではなかったかもしれないけど、何らかの得意なことだとか、好きなことだとか、趣味とか、あんまりイメージは今ないですけど、裁縫とか。

小島 そういう、作ってもらっているものもあるんですけど、今の事務局長も、もともとは子育ての参加者の1人みたいな感じだったんですけど。企業で働いた経験っていうので、労務とかそういうこともできるっていうので、だんだん事務局に引っ張る。

松村 それは貴重な戦力ですね。これは推測ですけど、今、子どもっていうよりか大人の話になってきますけど。大人自身もこの住んでいる地域の中で、仲間とかいる場所って正直ほしいじゃないですか。そういうときに、なおかつ同じミッ

ションだとかを共有している団体の中で、自分に期待してくれる人がいるだとか、自分を気に掛けてくれる人たちがいるっていうの、本当に大人にとっても不可欠なものであって、活動にどんどん参加していくというのは、理解できます。

小島 自分自身もそうなんですけれども、そこに関わることによって、いろんなことが。楽しみながら学びがあるというか、自分も楽しいけどいろんな人との出会いがあり、いろんなことを学ぶことができ、自分のためにもなっているという。そんなところで、関わることによって得る利益というのかな、すごく生きがいになっていくみたいな。

松村 生きがい、大切ですね。

小島 私は本当に子どもと一緒にやると、楽しいし面白い。子どもたちの発言とか行動とかが面白いっていうのが一番で。それで続けてきちゃったところがあります。

松村 なるほどですね。ちょっとまた大人側のところは、また後で戻るかもですけど。今、子どものほうに話が少し入ってきたので、お伺いしていきたいと思うんですけど。ここに参加する中で、子どもの様子だとか、変化とか、今いただいている本にもいっぱい書いてあるような気もするんですけど、特に印象的な事例だとか、ケースとかあれば。

小島 小さな古い一軒家の中で、毎年、こどものまちっていうのをやってたんで

すね。全国的にこどものまちってあるんですけど、もともとはドイツのミュンヘンで始まっている。もっともっとミュンヘンは大掛かりなものなんですけれども。日本で一番小さいこどものまちとかって言われているピンポン横丁っていうのを、ピンポンハウスで始めて。

そこには役場があって銀行があって、働いたら給料がもらえて、子どもたちもお店を作って。ラーメン屋さん作りたいとか、お菓子屋さん作りたいとか、いろんなもののお店を出して、それで働いて給料をもらって、それで遊ぶっていう、そういう小さな町なんです。



最初は、大人がちょっとお店とかも用意して、ある程度こどものまちってこういう遊びなんだという説明をして。どういうふうにするとか、町長がいて、役場があってっていうふうには、最初は大人が教えるみたいな形で始まるんですけども。徐々に子どものほうが話し合いを進めていって、どういうまちにしたいとか、どんなお店をどうするかとか、じゃあ税金はどうするんだとか、役場をどういうふうにするんだ、市長選挙をどうするか。そういうことを毎年繰り返して

いると、どんどん子どもに任せとけばできるようになってくるっていうのかな。子どもたちが毎年いろんなことを考えて、面白いからやってるんでしょうけど。

一回なんかは、大人は一応、参加できるんだけど、給付金みたいなもの。子どもからの税金で、大人にお小遣いをいくらもらえるようにして。それで大人も遊べるっていうふうにしたら、税金が足りなくなった、どうしようみたいな。そんなことを言う子も出てきて。じゃあどうするのって言ったら、じゃあ時間給を増やすとか。本当に子どもたちが、いろんなことを、楽しい遊びの中で出してきて。じゃあ活性化するために街のイベントをやるかとか、おにぎり早食い競争をやる。早食い競争、のどつまったらどうするの言ったら、ちゃんとお茶用意するから大丈夫とか。いろんなことを、すごくその街を活性化する、楽しくするためにどうするかみたいなことを、子どもたち同士で話し合っていてやっていくとか。市長に、5歳ぐらいの幼児が手を挙げたら、この子が市長になって大丈夫かみたいになったら、秘書を付けたいじゃないかみたいな話とか。

松村 子どもたちは、そこまで展開させていけるんですね。

小島 そうなんですね。

松村 びっくりですね。

小島 そういうのを本当に何年もやってたら、その子たちが中高生になったとき

に、今度はそれを自分たちでどっかの会議に出て行ってプレゼンテーションをするとか、そういうふうにいるんなことが進んでできていったりして、すごく自信を持っていく。こどものまちの全国サミットがあるんですけど、そういうところに出て行って、発言したりして。自分って結構、大丈夫っていうか、やれる！っていう、そういう遊びの中でも身に付けていくとか、そういうふうに見えるっていうのができる場ってすごくいいなっていうふうに思うんですけど。

他の事業なんかでもそうなんですけど、子どもの権利条約フォーラムに行って意見を言ったりとか、自分がファシリテーターになったりとか、そういうのを経験する、経験を積むことでどんどんいろんなことをやって、自分たちからやっていく。最初のきっかけづくりを大人がして、それが面白いと思えれば次へと。強制ではないので。最初のきっかけだけ、どうやってみる？って聞いて、そこで次に行くかどうかはその子次第なんですけれども。結構みんないろいろ面白がって、次はこうしたいとか、今度はここに行くとか。子どもってすごいなと思うし、時間はかかったりとか、話し合いしてもあっちいたりこっち話が飛んだりとか、なかなかまとまらなかつたりとかするんですけど。大人は口出ししないで、気長に待っていると何とかなるみたいな。

松村 子どもって本当に任せると、ここまで自分たちのいろんな、大人が思い付かないようなアイデアとか発想があっ

て、それを実現していく力まで持っているんですね。

小島 そうですね。

松村 すごいな。



小島 そう思います。だから、これは絶対できないって思えるようなことでも、ちゃんと聞いて、それってこういうこともあるんだけど、どうするとか。大人も持ってる知識を出しながら、こうだったらできるよねとか。できない方向じゃなくて、できる方向、こうだったらできるよねっていうふうに話をしていくと、子どもなりのものが出来上がっていくっていうのかな。

松村 なるほどですね。本当、こういう文化祭的なまちづくり的なことをするとしても、あなたはこの役だからこれを言われたままやればいいのかよと、大人が言うだけだと、多分ここまで広がらなかったんでしょうね。

小島 子どもが面白いと思うものって、大人がこうしてあげたらいいだろうと思

うのと、やっぱり違うっていうか。お化け屋敷を毎年作ってたんですけど、子どもたちに結構お任せなので。部屋を暗幕で暗くすると、道になるような机を置くっていうだけで、あとは何もしないと何も無いっていうときなんかでも、工夫して楽しむんですよ。これ楽しいんだっていう。だから、立派なものじゃなくても子どもなりの楽しみ方ってあるんだな。



松村 なるほどですね。その点に関連して、ちょっとだけ違う角度から伺ってきたいんですけども。小島さん自身だとか、恐らくこのときの大人のかたがた自身は、別に自分が子どもの頃そういう経験をしたことがあるわけではなかったと思うんですけども。なので、難しいところとか、どこまで子どもたちに任せればいいのかとか、どこで助ければいいのかとか、そういう線引きだとかって結構現場で悩んだりされなかったのかなとか、日々試行錯誤しているところもあったりするのかな、なんて思ったりもするんですけど。その辺り、大人側としてはどうだったんですかね。

小島 一番は安全っていうところ。お店だと食べ物出したりとか、いろいろ物があるとけがをしたりっていうところで、ある程度安全性っていうのは、配慮しなきゃいけないなっていうのはあったんですけども。こどものまちで何かつくるときでも、最初はいろんなもの、例えばペンがないとか紙がないとか、いろんなことをいちいち大人に、これはどこにあるの、どうしたらいいのって何回も聞いてくる。でも、その必要なものをそろえてどっかに置いておけば、大人に聞かなくなってきた。ここに全部あるっていうふうに分かっていたら、自分たちで動いていけるので。最初は何回も小島さんとかって呼ばれたのが、だんだん呼ばれなくなっていく。子どもにとって何が必要かっていうものが、大人も分かってくればそれを準備して、どこまではOKか、お金のことも、一応、予算的にはこれだけしかないから、これをどうするかっていうことを話したりはするんですけども。そこまで特に困ることとかもないというか。

松村 なるほどですね。

小島 子どもたちも、やっぱりちゃんとわきまえてるっていうか、そんなにむちゃなことはしないし、ちゃんと大人のことも理解してくれている。とても優しいし。

松村 こどものまちの活動を見守っていく中で、大人が一定程度、安全やお金を保証して、後は子どもに任せれば、可能性や新しいアイデアが発展していくって

いうことを、小島さん自身が感じた経験なんですかね。

小島 そうですね。すごいなあっていつも思いました。

松村 なるほどですね。分かりました。ちょっとまた戻るかもですけど、後で。ちょっとまた次のとこいきたいと思うんですけど。これまでのお話で、本当にこどもNPOさんとか、子どもに参画させている意味が初めて私も分かったような気がしていて、ちょっとわくわくしてるんですけども。一方で、行政は恐らく、小島さんが語ってくださったような子どもの可能性だとかってということに対して、あんまり意識が。現在ですらそうだって言われてる中で、昔っていうか2000年代後半とか半ばぐらい、行政はそういった小島さんたちの子どもの参画とかを大切にされてきた活動に対して、概して、どんなスタンスだったんですか。

小島 行政、でも最初の頃っていうのはあんまり行政と、特にピンポンハウスの事業なんかは、関わりがなかったの。

松村 自主事業ですかね、これは。

小島 そうですね。だから特にはなかったですね。最初の頃は、こども条例とかそういうものが、豊田とか日進とかいろんなところで作られ始めていたときで。そこに、条例を作るためのワークショップに、何人かスタッフが出ていったっていうのはありますけど。だから、こども条例とか作っていく過程では、行政は積

極的にされてたんじゃないかなと思います。

松村 そうですね、ちょうど2000年代入って、各地域でこういうこども条例とか、川崎とかいろんところで発展してた時期ですから。行政としても追い風が吹いていたような状況ですかね、こういう活動に対しては。

小島 そうですね。結構、理解がある行政の方たちとやれたなっていうふうには思ってますね。

松村 なるほどですね。ありがとうございます。NPOの方が、そういうふうな行政は理解があったなっていうふうには語る公的文書も存在しないので。この語り自体が、別に必ずしも、ちなみに言っておくと、行政を批判してほしいわけではもちろんなくて、そういうふうな評価されてるとかも非常に重要な事実なんですけども、そうなんですね。

小島 そうですね。2010年に開府400年記念で、吹上ホールで15日間か、結構、長いこどものまちを、なごや子どもCityっていうのを、名古屋市の行政の方たちと一緒にやったんですけど。それに関わってくださった行政職員の方たちは、かなり苦勞された。上との交渉とか、いろいろかなり苦勞されたと思うんですけども。それをちゃんと子どもの会議をやりつつ実現できたっていうのは、やっぱりその努力、理解があったからだなどは思ってます。

松村 この図でいうと今の話は。

小島 載ってないか。2010年、載ってないですね。

松村 いま一度おっしゃっていただけるとすれば、2010年に、えっと。

小島 開府400年記念事業。

松村 開府ですね。開府400年ですね。ちなみにこのときやりとりされていた行政職員、苦労されていた行政職員っていうのはどこの局。子ども青少年局。

小島 子ども青少年局ではあって、何課になるんだろう。名前いろいろ変わりますよね。そのときは、杉野みどりさん、今の副市長さんがちょうどいらしたときなんですか。

松村 そうなんですか。

小島 かなり青少年局の職員総出で大々的にやった事業なので。長期間ですし、いろんな親からのクレームとかもあったりしたみたいで、ちょっとその辺で苦労されたんじゃないかと思えますけど。記念事業っていうことで、次につながっていかない、小さなまちはやったりしてたんですけど、なかなか続けていけないというか。ミュンヘンは2年に1回、こどものまちが開催されたりしてるんですけど。なかなか行政の事業として、そういうものを続けていくっていうのは難しいんだろうなと。

松村 分かりました。無理に引き出したわけではないですが、一緒にやっぱり事業やっていく中では、ちょっと足並みがそろわない部分だとか、NPOさんから見るともう少し行政こうしてよみたいなの、そういうふうに感じるところとかもあったのかなと思ったりもするんですが、その辺りどうですかね。

小島 子どもたちに完全に任せるっていうのは無理なんだろうなと思うんですけど。2010年のこどものまちでも、スタッフTシャツとか着てると、スタッフTシャツ着てる子どもが遊んでるとかっていうクレームが付いたりすると、それに対応する行政職員が子どもたちに規制をかけるみたいなのところがあったりして、なかなか難しい問題はあると思うんですけども。どこまでやらせることが可能なのかは、難しいですね。

松村 その点でいうとやっぱり、こどもNPOさんとしては最大限子どもたちにやらせるというか、任せたり委ねたりしたいけど、行政のほう必ずしもそういうわけではないかなっていう感じですかね。

小島 そうですよ。

松村 そういうときは、やっぱり一応行政が決めた新しい方針とかに従うとか。

小島 なんか知らない間っていうか、こっちにまで伝わってこないっていうことはあるので。すぐに動かなきゃいけないっていうこともあるんでしょうけど、

後になって子どもから聞くことおありました。子どもたちが参画するような事業が時々あっても、1回で終わってしまう。もう少し継続的に。一応、年に1回くらい子ども市議会なんかはあるんですけど。そういうものがもう少し発展していったら面白いだろうとか、子どもたちも自分がやったことが形になって、終わったりしたらすごく自信につながったりするんだろうなと思うんですけど。なんか、どうなんだ、どこまでできてるんだろうなっていうのは、ちょっと残念だなって思うことはありますけど。

松村 なるほどですね。分かりました。あと行政との共同事業、いくつかありますけど。一番もめたというか、けんかしたというか、意見が異なったというか、そういうのがあればぜひ。公的文書は残っていないのですけど。

小島 もめたですか。それ、原京子に聞いたほうが分かるかもしれないですけど。そんなに私自身ももめたとかっていうのはないんですけど、やっぱりそういう会議とかをして。

松村 日常的な。

小島 行政との会議に出ても、させたいというか、やっぱりいいものをつくりたいっていうのはあると思うんですけども。そのままを受け止めるっていうのは難しいのかなっていうか。

松村 そのままを受け止めるって、どういうことですか。子どもたちにそのままってことですか。

小島 そうですね。そういう優等生っぽいついていうか、そういう子たちだけじゃなくて、やっぱりいろんな生育とか環境とかを持っている子どもたちがいて。その子たちの言葉とかっていうのが、大人にとってみたら、あんまりいいと思えないっていうときもあるんですけども。

松村 ちょっとやんちゃだったりとか、言葉使いが、とかっていうのがあったりしますよね。

小島 でも、どうしても、大人に対しても理解できるような発言っていうのは、聞き取りやすいというか、そういうのはあるかなっていう。

松村 なるほどね。そうするとそうか、いろんな子どもたちがいろんな意見を言うけど、行政が採用するのはやっぱり無難で、行政が進めようとしていることにフィットするような発言が、結果として生き残っているみたいなことは結構ある。

小島 そう、そんな気はします。

松村 なるほどですね。子どもの参画とかって、こども家庭庁ができましたが、本当にここ何年間ですよ。

小島 そうですね。

松村 なので社会的にはだいぶ、そこら辺の意識は変わってきている一方で、もっと早い段階からやはり先駆的に、こういう視点に立って活動されてきた小島さんの目から見て、この20年ぐらいの子どもの参画だとか子どもの権利ってところの変遷とか、どういうふうにご覧になっていますかね。

小島 最初の頃は、自分たちも子どもの参画とかよく分からない部分もあって。それをどういうふうなものかっていうものを学ぶところから始めて、実際に子どもたちとやっていく中で理解していけるというか、そういう部分は大きくあったと思うんですけども。行政的にも、今、子どもの参画っていう言葉は使われているし、認識されているんだけど。実際に子どもの参画っていうものを、どこまで分かってやられてるのかなっていうか。形だけかなと思う部分も。

松村 なるほど。

小島 もうちょっと本気で、本当に子どもの参画っていうものを入れていこうとしたときに、もうちょっと何か、と思います。

松村 言わんとされてることは分かります。やっぱり本当に最近ですよ、子ども会議やこども大綱とかできたりしていく中で、あちこちで今、そういう子どもの声聞きますとか、そういうワークショップとかって。本当にある種ブームっていったらちょっと言葉悪いかもしれませんが、そういうのが広がっている一

方で。子どもの参画の本当の意味、私も分かってないと思うんですけど、さっきの話だと小島さん自身が実際にこういった、こどものまちとかを参画する中で、こういうことなのかって時間をかけて体得とか理解されてきた境地にまで、なかなか簡単に皆さん、なることはできない。そうなってくると、どうしても形だけとかっていうアリバイづくりじゃないけど、一応子どもの声は聞きましたみたいな、そういう方向に利用されてるようなところも、ちょっと私自身も感じますが、その辺りですかね。

小島 そうですね。子どもの声を聞いたら、それをどういうふう子どもたちに見えるような形になっているのかとか。名古屋こども条例のこども会議とかいうのもあったんですけど、なんかあまり。広いところにたくさん集めて子どもの話を聞くみたいな感じの最初の会議で。それは本当に子どもたちが話できる環境なのかとか。

松村 確かにね。ちょっと人前で話すの苦手な子とかも、もちろんいるでしょうしね。

小島 どういう形で子どもの声を聞き取るのか。以前、あのときはコロナのときだったかな、いろんな子どもたちの声を児童館とかで集めたりしたんですけども。その声を聞く環境を整えるっていうのも、すごく工夫してた、私は関わってなかったんですけど、聞き方とかいろんなことについても、かなり気を付けてやってたと思うんですけど。本当に子ども

の本心を聞くっていう。子どもって大人がこう答えれば喜ぶだろうなっていうことを察して言う場合もあって。

松村 難しい。

小島 本当に本音で自分の思ってることをストレートに話せるような、人とか場と関係性みたいなものがないと、この人はこういうことを求めているから、こういうふうに言ったら喜ぶんじゃないかなって思って発言することもあるので。関係性をつくるっていうところから結構、大事じゃないかな。

松村 確かにそうですよね。信頼しているこのスタッフとこの空間で、ちょっとあんまり人いないからこそ言える本音とかあってあるはずなのに、急に市役所の会議とかでぼんって出されて、さあ本音言ってるって言われたら、それは全然違いますよね。

小島 そうですよね。だから、そういう場とか関係性って大事だろうなと思うし。子どもたちといろいろ話をしていく中で、子どもが嫌って言えるような余地はいっぱいつくっておきたいなと思って。大人が言うから従わなきゃいけないんじゃないよっていう。

松村 そうですね。確かに子どもの声、聞くっていったら、必ず言いなさいって趣旨ではないですもんね。黙秘権じゃない、黙秘権ってちょっと変ですけど、言わない自由、言わない意思も尊重しなけ

ればならないですもんね、自己決定権としてね。

小島 そうですね。

松村 今の話、すごく大切だと思っていて、その方との関係性だとか場とか空気っていうのが、今、最近広がっている子ども会議では飛ばされて。そういうのに本当に時間かけてつくっていった上での子どもの意見が、やっと引き出されるかどうかなっていうところだけど、そういうところがすっ飛ばされているような気がしますね。

小島 今、子ども食堂みたいなものもいっぱいあるし、子どもが行ける場所、フリースクールとか、私たちが関係している惟の森っていうオルタナティブスクールがあるんですけど。そういう大人との関係性を築いている中で出てきた、子どもたちの言葉とか声とか、そのものを拾ってあげていくんだったら生の声が届けられるんじゃないかなと思うんですけど。子ども会議で集まってください、意見言ってくださいってなったときに、本当にその声って本音なのかなとか。



松村 本当そうですね。

小島 それはそれで、またそういういろんなことを思って活動している子どもたちもいるので。ちゃんと声を出せる人たちもいるから、そういう人たちが、そういうのに参加していくっていうのも大事だなと思うんですけど。

松村 そうですね。そこはすごく大切なところなので、逆に行政の人が、今、ここでさせていただいたような提案を一体どう考えているんだろう、また別の機会で聞いてみたいなという思いますけれどね。分かりました。ちょっと一回、休憩しましょうかね。でもこれ貴重ですね。立派な冊子にも。

小島 それ一回しか作れてないというところが、なかなかその活動を残せていないので。

松村 このピンポンハウスに来ていた子どもたちで、今、スタッフ、ボランティアに来ているような子もいらっしゃる。

小島 今はいないかな。いまだにつながりがあったりするっていうのはあるんですけど。ちょっと前に私がもう引退するってなったときに、ピンポンハウスで一緒にやってたお子さんから手紙をもらって、ここにピンポンハウスがあったことはすごくよかったっていうようなお手紙って、うれしかったです。

松村 根岸さんとかも、差し支えない範囲でいいですけど、こういうところからの方ですか。

小島 いや、根岸さんは途中から。

松村 そうなんですね。私も去年の4月、名古屋に来て。緑区の児童館に行って結構、衝撃を受けました。

小島 衝撃。そうですね。

松村 割と整った公的な施設でありながら、すごく、みんな自由に、施設の中で駆け回り、いろんなことやってる。ああいうところは、とてもいいなと思いましたね。

小島 緑と中川は結構。

松村 中川もああいう。

小島 中川も、うちがやってるとこなので。中川も地域性があるのでね、来てる子どもたちにもいろいろ違いはあったりするし、スタッフも個性的なメンバーが多いので。特に緑は個性的な。

松村 ピンポンハウス、復活しないですかね。

小島 本当にあつたらいいなと思うんですけどね。

松村 建物の老朽化や台風とかが心配ですか。

小島 だいぶ古いし、2階建てなんですけど、借りる前から誰も住んでいない空き家で。その前におばあちゃんが1人住んで、卓球場をやったみたいなんですけど。そのおばあちゃんの荷物が2階にいっぱいまだ置いてあって、どさっと降ってきたら怖いとか。畳の部屋もちょっとふかふかしているので、そのままはちょっと使えない。

松村 そうなんですな。

小島 田舎のおばあちゃん家みたいな雰囲気がある、いいところだったんですけど。卓球場だったので卓球台も置いてあって、床をちょっと張って、卓球もできるようにして、いろんなことできるようにしたので。そういう場所が本当はほしいんですけどね。なかなか。

松村 また空き家とか、高齢化でどんどん空いてくから、その中でそういうところが出て。すごくいいなと思いますね。やっぱその、学校だとか保育園だとかみたいな、特定の目的ではない、いろんな人がある種、出会ったりとか、いろんな大人とかに会えたりだとか、選べることができる施設って本当に少ないと思うので、貴重ですよ。

小島 そうですよ。本当に自由に好きなときに来て、好きなときに帰ってって。台所もあったので、いろんなものを作ったりもしたんですけど、なかなか面白いというか。お店を子どもたちが出すのに、鼈甲飴を出すって言って。フライパンで、鼈甲飴の試作品を何回も作るん

ですけど。真っ黒な鼈甲飴を食べさせられるとか。そのうちだんだん上手になっていくみたい。



松村 いいですね。すごい。お茶飲みながら結構です。といっても質問自体は実はもうあと二つしかないのですけれども。一つ目のほうが、ここ20年ぐらいの間で、やっぱり名古屋市の子育て政策もそうですし、国としてもいろいろ少子化とかが、本当にますますいろいろ言われていく中で、子ども政策だとかNPOさんを取り巻いている状況というのは、ものすごく激変しているように思うんですね。その辺り小島さんはどういう印象を持っていますか。もしくは、こどもNPOさんが、その流れの中で、影響や関係を受けていると思うこととか、何かありますか。

小島 こどもNPO自体、今ちょっと、最初の頃と事業の形が変わってきていて。それはいろいろやってきてる中で、今必要なものが取り入れられてきているっていうのもあるんですけど。公営住宅で子どもたちの無料塾というか、学習サポートみたいなのを始めて。それをモデル事業として行ったことがつながって、学習支援が事業になった。そういうものが名古屋市でもいっぱい、できていたりする

んですけれども。そういうところ、生活保護世帯とか、そんな何かちょっと困り事があるっていうところは、すごくいろんなものがつくられてるっていうか、反映されていたりしてる、子ども食堂もそうなんですけど。

ただ私なんか、本当に最初のきっかけが、特に問題がないというか、普通に学校に行って生活している子どもたちが、学習だけではなくていろんないいところを認めてくれる大人とか周りの人たちがいて、その子がいろんなところで自信を持っていてくれるといいなっていうふうに思ったので。そういうピンポンハウスみたいな、特に困っている子どもじゃない、普通の生活している子どもたちが、また違う場所で自分を発見するみたいな、いろんなことができる、そういう場所があるといいなって、すごく思ってる。でも、そういうところってなかなか増えない。児童館でも各区に1個しかないわけなので、本当に近くに住んでいる子しか来れなくて。



松村 確かに。

小島 その子たちが何かを次につなげてくようなことに発展できるのかっていう

と、なかなかそういうところまで、つながっていかないっていうのかな。いろんなものができてきていて、それもすごく必要なんだけど。やっぱり子どもたちが本当に普通の生活をしながらも、他のいろんな問題のことに触れて、自分の思っていることを実現していけるような、場所とか人とか、そういうのがもう少し増えていくといいなというふうに思います。

松村 なるほどですね。

小島 みんな忙しいから、子どもも忙しいから、なかなかそういう時間もないかもしれないんだけど。

松村 例えば、この20年ぐらい、子育ての社会化とか、社会全体で子どもを見ていきましょうという声をよく耳にします。子どものときは、一定期間、ピンポンハウスに居場所があったけれども、そういう子どもたちが、中高大になったときに、家庭以外で支えてくれるような仕組みに、うまくつながっているかっていうと、あまりそうではないような気がします。その辺りいかがお考えですか。

小島 そうですね。一番そういう中高生、もうちょっと高校も卒業した人たちが行く場所っていう、そういう場所はないなって思うし。子ども真ん中社会とかって言うけど、イメージ的に子どもは真ん中にいるんだけど、周りの大人がわいわい。

松村 あんまり子どもが意見を言えず黙って、周りの大人がぎゃーぎゃー言ってる感じですかね。

小島 大丈夫かなって思ったりはするんですけど。ちょっとずつは変わっているのかなって、今、校則の問題なんかもちよっと出てきたりして。本当にその校則って必要なのっていうところが、検討されて見直されることもあるのかなと思うんですけど。不登校の子たちの居場所なんかも、まだまだ少ないけど。いろんな個性とか、なかなか学校っていうところに、なじめない子もいるので、やっぱり多様性みたいなものって必要だろうし、そこにお金が付かないとなかなか苦しいんだろうなと思うし。

松村 そうですね。行政的には、もう今、成人年齢が引き下がって、18歳になったら成人なので、自立せよみたいなニュアンスだと思うんですけど。ついこの間まで、そういうフリースクールとかこういう居場所にいた子たちが、自立できるかっていったら、できるわけないわけで。そこを誰が支えるのっていったときに、結局、今、誰もいない状態に近いような状況ですよ。



小島 そうですね。こども NPO も、18 歳以上の子たちにどういう支援ができるかっていうので、いろいろ悩んでみたいんですけど。

松村 そうですね。卒業してからも団体に顔を見せ、いろいろと相談とかしてくれることは、スタッフとしては恐らくうれしいとか、ありがたいていう思いがある一方で、違う社会資源だとかサービスとかに、うまくつなげてないってことの裏返しなのかもしれないですよ。

小島 そうですよ。

松村 そこら辺、すごくジレンマっていうか難しいですよ。それも NPO だけが考える問題ではなくて、全体を仕切っている行政が、ちゃんと何かしらの止まり木じゃないけど、つながる先だとか社会資源とかっていうのを準備しなければならぬんじゃないかなって、個人的には思ってるんですけど。

小島 そうですね。そういう点では、つなげるところに苦労しているっていうのは、ありますね。

松村 国の予算とか行政予算見ると、本当に日本は先進諸国の中でも、とても低かったのが、それも本当かどうか分からないけど、ここ1年ぐらいは一応上がってますと。ここ何十年間前に比べると、上がってはいるんだろうけど。どうですか、そういうお金のところもそうだし、社会のこういった NPO さんの活動に

対する、温かい目とか追い風だとか、そこから辺変わってきた実感がありますか。

小島 まだまだですよ。

松村 まだまだですか。

小島 予算的などころではやっぱり人件費のところ。本当に児童館なんか人数的に、もっと本当は必要です。

松村 確かに。

小島 特に中高生と関わりを持とうとすると、もっと丁寧な関わりが必要になるんですけれども、なかなか人が増やせないってところとか。いろんな役割は増えてきてるんですよ、中高生の居場所をつくりなさいとか、学習支援しなさいとかって、いろいろあるんですけれども。それをするための人とお金っていうのは、まだまだ足りないかなって思います。

松村 そうですね。少し難しく言うと、資源とカリソースっていう問題ですかね。やっぱり子育てって本来というか昔は、特に日本は、家庭がまずするものっていう考え方があったから、そこに投入されるお金とかもしくは人員とかって、あんまりなかったっていうのがあって。最近でこそやっぱり増えたかもしれないけど、それを上回るような新しい、あれもしなさい、これもしなさいみたいな役割が増えていて、結果としてどんどんギャップが減るところか増えてっていうよ

うな、そういうお話も聞いたりするんですけど。

小島 そうですね。必要だからいろいろやり始めると、それが行政のほうから、やらなきゃいけないものになっていったりして。じゃあそれだから予算が増えるのかというと、そんなに増えない面も。

松村 そうですか。現場のかたがたの思い、特に無償的な思いとか行動に、ある種依存というか甘えてるのが今の行政なのかな、なんて私なんかちょっと思ったりもしてるんですけど、その辺りどうですか。

小島 本当に最初はボランティアから始まって、今のスタッフだって本当にわずかなお金で、やってきたんだけど、それって長くは続けられない。NPOで働くっていうのが、今、ある程度給与も出せるようにはなってるんですけど、そういうところでまだまだ少なくって。せっかくいいスタッフに育てきたのに、結婚するから他のところに行きますとか、そんな形で。せっかくいろいろ一緒にやってこれた人たちが続けていかれないとかっていうふうな状況になると、どうやって保証していくのか。そこから辺はいろいろ苦労しているところです。

松村 ありがとうございます。ちょうど最後の質問が、NPOの今後というところで。今お話しいただいたようなところとも関係してくるかと思うんですけど。今後さらに発展していくために、社会的にもしくは行政からでもですけど、NPO 発展

していくために必要なことだとか課題だとかを、いろいろ教えていただくと。感じるどころですね。

小島 今、こども NPO は、委託が一つなくなっただけで、指定管理とか助成金とか補助金とか、そういうもので何とか活動を続けていってるんですけれども。やっている事業っていうものの必要性と価値というか。

松村 必要性と価値。

小島 その辺である程度、見合った、その人たちが続けていけるための、生活できるだけの補助というものは。

松村 必要。

小島 もっと必要だなんていう。どこまで続けていけるのかとか。

松村 そうですよ。

小島 また、NPO って 9 時 5 時とかきりがなかったり、子どもによってはそんなこと言っていられない部分もあったりするので。

松村 NPO、確かに 9 時 5 時じゃないですもんね。突発案件だとか緊急案件とか、結構。

小島 そういうものはあって。

松村 あるんですよ。

小島 そこで動いたりしてるスタッフもいるわけで。きちっとした決められた時間内の仕事ではなかったりするんで、そこら辺の。NPO 側もいろんなことを伝えていったりとかしてもらおう努力は必要なんだろうなと思うんですけれども。ちゃんと活動が続けていけるような仕組みとか。

松村 そうですよ。今、おっしゃったようなことは、恐らくこども NPO さんだけではなくて、恐らく NPO の業界全体としての課題というふうに言われているかと思うんですけど。その辺り、名古屋市の行政職員はどれくらい認識とか改善する、本気なのかよって思ったりするときもあるんですけど。小島さんから見てその辺り、どうですかね。

小島 今は河村市長が、結構、言葉的にはいろいろ言われたりするんですけど、それが継続的につなげられるような、そういうものになっているのか。今これが言われている、叫ばれているから、これをぼんとやって。今度はこっちだからぼんとやって、ではなくて、本当に子どもたちが、いろいろな環境にいる子どもたちも含めてみんなが、大人になって自分の力で生活できるような形をつくっていくための、継続していけるような仕組みが、必要だと思います。

松村 確かに今の市長は、割と子どもとかを言っている人ですし、そこで当選したことも少しあるのかもしれないけど。やっぱり政治家だけじゃなくて、誰が局長だとか上とかって、またちょっと変わ

ってきますもんね、そこはね。ただ、概して、さっきおっしゃったような、必要性とか価値に見合ったものがあまりないっていうのは、それはもう、何とかならないんですかね。

小島 何とかならないんですかね。どこかどういったらどう、とかあるんでしょうね。子どもの最善の利益っていうふうに言っているから、それを支えるものが、ちゃんと社会や行政でつくってけるといいのかな。

松村 子どもの最善の利益自体は、重要性は今や、もはやトップだけ。それを実際に支えるかたがたへの目配りだとか、そういう人たちの生活とか価値っていう視点が、ちょっと社会的な重要性に比べると、見劣りしているなっていうところはありますよね。

小島 そうですね。

松村 どうすればいいんでしょうね。

小島 どうすればいいんでしょうね。どこがどうすればいいんでしょうね。

松村 ちょっと補足の質問なんですけど。人がいないっていう点に関していうと、一方で最近、定年退職されて暇なおじいちゃんとかおばあちゃんとか、いっぱいいると思うんですけど。そういう地域の方をうまく巻き込むことによって、人手不足を多少なりとも挽回できたりする。あとさっきおっしゃったように、得意なことって皆さんそれぞれあるじゃないですか。それこそうまく活用とか積み

重なっていけば、少し可能性があったりするのかな、なんて思ったところもあるんですけど、そこら辺はどうなんですかね。

小島 事業によってはっていうか、やっぱり子ども食堂とかそういうものって、本当に地域の方の協力とか得やすいですよ。

松村 なるほど。

小島 緑区はプレイパークを4カ所やってるんですけど。そういうものにも地域の方が、一緒につくっていくということでは、できていくんですけども。今、高齢の、自分もそうなんですけど元気だし、まだ働けるし、いろいろ趣味も多彩なので。なかなかそのときに行けるかとか、どういうところだったら手伝えるかっていうところは、限られてきたりするのかな。子どもは地域で育つとは思っているんで、いろんな方が関わってくださるのは、いいことだなと思うんですけど。なかなか難しく、どうしたら皆さんを、そういうところに来ていただいたりできるのかなっていうのは、悩ましいですね。



松村 なるほどですね。子ども食堂は多分もう良くも悪くも雑多な感じっていうか、カオスで。本当にいろんな大人がいること自体が、もしかしたら魅力なのかもしれない一方で、こどもNPOさんだとか、本当に子どもの支援を第一的にされている方っていうのは、やっぱり一定の専門性が必要だと思うんですね。相手を否定しないだとか、傾聴するだとか、そういうところでいうと、誰でもウェルカムが売りでもあり弱さでもある子ども食堂と、ちょっと差別化というか違うようなそういうイメージを持っているんですけど。その辺り、違いをどういうふうに考えていらっしゃいますか。



小島 子ども食堂でいろんな地域の方が協力していただく中で、考えの差とか、こうしなきゃいけない的なことも思われる方もいるのを、ちょっとずついろんなところで話をして、やっていく中で理解をしてもらっているようです。子どもに対して、こうすべきとか、気になる行動も、もう少し見守る体制をつくっていくとかは、やっているようなんですけども。なかなか、見守るって、一言で言えば簡単な言葉かもしれないんですが、実際にやろうと思うと難しいところもあっ

て。あの子はこんなことしてたのに、なんで注意しないんだとかっていうことにも、やっぱりなるんで。どこまでが大事で、どこまでを見守る、その辺は本当に長く関係性をつくっていくしかないのかなと思います。最初からそういうことに理解がある方っていうのは、いらっしゃるので。

松村 行政の最近の文書とか見ると、子ども食堂、地域子育て拠点とか、どんどん連携して協働してみたいな、そういうこと書かれたりするけど。実際連携とかって、そんなに簡単なもんじゃないですよ。

小島 そうですね。なかなか難しいところはありますね。

松村 そうですよ。今おっしゃったように、物事のスタンスとか考え方も人それぞれ違うだろうし、ましてや団体によって違うだろうし。

小島 そうですよ。だから、同じ子ども関係のことをやっているNPOとかでも、それぞれの考え方がちょっとずつ違っていたりもするので。

松村 そうですよ。

小島 それを一致させるのは難しいことだし、それぞれの特徴で、いろいろあっていいとは思いますが。

松村 あと、行政といえば、子ども会が一応あるじゃないですか。どういう印象ですか。

小島 今って、子ども会連合みたいなのところに所属している人が、本当に減ってますよね。

松村 そうですね。地域によってはもう廃止かな。

小島 そうですね。私の子どもが子ども会に入っているぐらいのときに一応、所属はしてたんですけど。軍隊的なあれが、ものすごく苦手で。ぴっと笛を吹いて、みんなを集める。うーんって、すごくそれが苦手だったので。今どうなのか私もよく分からないんですけど。私たちも自主的な子ども会みたいなのはつくってたんんですけど。

松村 はい。

小島 とても自由な。今、公園で火をたくとか、できないじゃないですか。

松村 そうですね。

小島 昔、子ども会はデイキャンプっていうことで、公園で火を使うことができたんですよね。もう完全にできないんですけど。それって、そういう体験もすごく大事。

松村 確かに。

小島 火をおこすとか、それで何かを作るとかって、すごくいい体験なんですけど。それが、キャンプ場に行かないとできない。昔は雑木林を手入れして、その間伐材とかを燃やして、そこでパンを焼いたりとか、カレー作ったりとか、みんなでやったりして。火の怖さとか熱さ、いろんなことを感じる、体験するっていうことは、すごくいい場だったと思うんですけど、全く今できないので。火は、まあ今、キャンプがはやってるから体験できてるのかな、まあ、マッチで火をつけることはないと思うんですけど。そういう、いろんな体験の場がどんどん減ってるなっていう。きれいにはなってるんですけど。

松村 自由に体験とか、アイデアとかを発言できる場ではないですよ、子ども会とかは。

小島 そうですね。子ども会でボウリングに連れて行くとか、食事会する。うーん、とは思うんですけど。でも、お母さんたちも忙しいから、そんな丁寧な手のかかるようなことはできないし。

松村 PTA みたいな、やりたくない仕事みたいな感じになってますよね。

小島 そう。

松村 でも、一方で行政としては、なんか子ども会が地域にはあるから、みたいなのところも、ちょっとあって。ちょっと時代錯誤じゃないけど、ギャップを感じますけどね、私なんかは。

小島 子ども会連合では、どういうことをやっていますか。

松村 分かりました。最後のところに関連して、もしまだ付け足していただけるところとか、大まかですけど。未来に期待することとか、何かありますか。

小島 未来。本当に子どもたちが自由に、いろんなことができる場がもっと増えてほしいなと思うし。それにちゃんと付き合える大人というか、そういう理解できる大人が増えるといいなって最初るときから思ってるけど、なかなか増えない。

松村 ここまで子育ての社会化とか言われたり、政策的にはいろんなお金増えたりしているはずだけれども、実際、増えないなっていう感じですね。

小島 そうですね。増えるといいなっと思っています。

松村 そこはすごく重要な課題ですね。貴重なお話、ありがとうございました。

